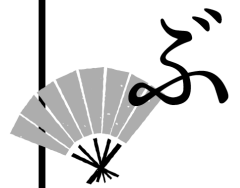


古典落語



に学



落語家

立川談四楼

第四十九回

いちがんこく 一眼国

昔

は本所あたりを向^{むこう}両国と呼び、たいそう賑わ^{にぎ}っていたそうです。見世物小屋に人氣があったのですが、中にはインチキなものもあったとかで…。

「さあ目が三つで齒が二本の化け物だ、見ておいで！」の声に木戸錢^{きどせん}を払って小屋の中へ入ると、下駄^{げた}が片っ方だけ置いてある。確かに目が三つで齒が二本です。

さらにばかばかしいのは『六尺の大いたち』です。いたちは大きな動物ではありません。それが六尺、百八十センチ超の動物なのだと言うではありませんか。

「さあ山からとれた六尺の大いたちだ。側^{そば}へ寄ると危ないよ」そんな呼び声に誘われ、木戸錢を払って小屋に入ると、板が立

てかけてあるだけです。

「六尺の大いたちと聞いたけど」「板の長さが六尺あるだろう」「えっ、大きな板の大いた（大板）？」「そうだ」「大いたちのちは？」「板の真ん中に赤いものがついている。それが血だ」「え、えー、六尺の大板血かよ。側へ寄ると危ないよって」「板が倒れるとケガをするからね」「山からとれたってのは？」「材木はみんな山からとれるよ」

見

世物小屋の経営者を香具師^{きゃぐし}と呼びました。テキ屋とも言いますが映画『男はつらいよ』の車寅次郎をご存知でしょうか。渥美清が演じたフーテンの寅の仕事が香具師です。ある香具師^{かうぐし}が六部^{ろくぶ}を招いてご馳走^{ちそう}しています。六部とは諸国

を巡る僧侶で、いろいろ珍しいものを見聞しているはずです。どうかそれを聞き出して見世物小屋に出してやろうというのが香具師の魂胆です。見世物はほぼインチキですから、香具師は何かカネの取れる本物を探しています。そんなわけで香具師は六部に酒を盛んに勧めます。

「たった一度ですが、忘れられないほどの恐ろしい思いをしました」「ほう、どこで？」と香具師は思わずグッと前のめりになります。

「江戸から北へ百二、三十里行ったあたりで、大きな原へ出ました。原の真ん中に榎えのきがあり、その下に小さな男の子がいて、宿を聞こうとしたら、顔を上げた男の子を見て驚きました。何と一つ目だったのです。いや肝を潰つぶして逃げ出しました」

香

具師は実にいいことを聞いた、『一つ目小僧』は儲もうかるぞとほくそ笑みました。香具師は六部の話したことを帳面に書き込み、翌朝、旅支度を整えると、北を指して江戸を発たちました。歩きに歩きましたが、欲の皮が突っ張っている、疲れもあり感じません。

何日かかったでしょう、ついに大きな原へ出ました。なるほど真ん中に榎があります。その根元に六部の言った通り、男の子がいました。確かに一つ目です。香具師は猫撫なで声で話し掛けます。「坊や、いいものをあげるからこっちへおいで」。男の

子が近づいた瞬間、香具師は男の子を抱えて駆け出します。

男の子が悲鳴を上げた途端です。フオーと竹法螺たけぼらが鳴り、ジャンジャーと早鐘が打ち鳴らされます。誰もいないと思っていた原から大勢の村人が立ち上がり、香具師を追ってきます。これは大変、子どもも惜しいが命はもっと惜しい。香具師は男の子を放り出し、逃げ出します。しかしやはり疲れていたんでしょ、慣れない土地でもあり、香具師はつまずき、転んでしまいます。そこへ押し寄せる村人、香具師はとうとう捕まってしまう。香具師が驚いたのは村人が全員一つ目だったことです。

香具師は役人の前に引き出されました。

「これ、その方の生国しやうこくはいずこだ。生まれはどこじゃ。なに江戸とな。子ども拐かどわかしの罪は重いぞ。面おもてを上げい。面を上げい」村人が香具師の髪を掴つかみ、顔を無理矢理上へ。

「やや、御同役ごどうやく、御同役、こやつ目が二つあるぞ。よし、調べは後回しだ。早速、見世物に出せ」

こ

れが『一眼国』です。立場が見事に逆転、聞く者の固定観念を引っ繰り返します。あなたも少しばかりドキッとしたのではありませんか。このネタは林家彦六になった八代目林家正蔵がよく演じていました。懐かしいですね。